

内的作業モデルの児童期から青年期における変容 — 重要な他者という観点から —

内田 利広

A Study about Changing Process of Internal Working Models between Childhood and Adolescence :
from the Perspective of Significant Others

Toshihiro UCHIDA

Accepted August 20, 2014

抄録：本研究は、ボウルヴィの提唱した内的作業モデル（以下 IWM）の児童期から青年期にかけての変容について検討したものである。大学生を対象として、児童期・青年期それぞれの愛着スタイルを、IWM 尺度を用いて測定し、合わせて重要な他者のイメージや影響などについて、大学生 112 名を対象に質問紙調査を行った。分析の結果、重要な他者のイメージとして「当てになる存在」「前向きな存在」「大人的存在」の 3 因子を、また影響については「人間不信」「自己受容」「情緒不安定」の 3 因子が抽出された。さらに、愛着スタイルの児童期から青年期への変容については、ほぼ 5 割の者が変化しており、中学時代や高校時代における先生や友人との出会いによって、IWM が変化しうることが示唆された。また、重要な他者としては、「前向きな存在」や「自己受容」を得られるような他者は、親密性の回避を低下させ、人間不信を感じる他者との出会いは、見捨てられ不安や親密性の回避を高めることが示された。

索引語：内的作業モデル（IWM）、見捨てられ不安、親密性の回避、重要な他者

Abstract : The present study investigated changes in Bowlby's internal working model (IWM) between childhood and adolescence. A total of 112 university students completed a questionnaire survey comprising questions regarding the influence and characteristics of significant others and IWM scales to measure attachment styles in childhood and adolescence. The following three factors constituting characteristics of significant others were identified: "trustworthiness"; "positivity"; and "maturity". The following three factors relating to the influence of significant others were also identified: "misanthropy"; "self-acceptance"; and "emotional disturbance". Around 50% of participants demonstrated a change in attachment style between childhood and adolescence, suggesting that IWMs may be affected by encounters with teachers and friends during junior and senior high school. The present findings also revealed that significant others who represent a "positivity" and facilitate "self-acceptance" can reduce avoidance of intimacy, while encounters with significant others who generate a sense of distrust of people increase avoidance of intimacy and abandonment anxiety.

Key Words : internal working models, abandonment anxiety, avoidance of intimacy, significant others

1. 問題と目的

近年、児童虐待を始め、母親の育児困難の問題が大きくなっている。そうした背景について原田(2004)は、1980年生まれの子どもたちを対象とした大規模な母親の子育て調査を行い、さらに2003年にも、同じような調査を行い、両者の比較を行っている。その結果「乳幼児をまったく知らないまま親になる」母親たちの割合が増えており、さらに「子育てのイメージが現実のものと大きく乖離していること」を指摘している。それに加えて、乳幼児を育てる親の孤立化が極端に進んでいることも同じ調査から明らかとなっている。こうした親の孤立化や育児不安が広がる現状に対して、ボウルヴィ(Bowlby, J.; 1969; 1973; 1980)が提唱して以来、これまで主に発達領域でなされてきた多くのアタッチメント研究が、子育てを行っている保護者への支援の場面でどのように活用されうるのかと言及されるようになってきている(数井・遠藤, 2007)。

ボウルヴィの理論の中でも、特に母親(あるいはそれに代わる人)との愛着を通して形成される、自分や他者に対する認識のパターンである「内的作業モデル(Internal Working Model: 以下IWMと略す)」の理論は、母子間の関係性の問題について理解を深め、それを防ぐための援助法について示唆を与えてくれるものとして期待されている(内田・河合・大田・大東, 2003)。

IWMとは、幼少期に愛着対象との持続的な相互交渉を通して形成される、愛着対象および自己に関する心的な表象のことである。愛着対象に関するIWMとは、愛着対象への接近可能性や愛着対象の応答性に関する表象モデルであり、自己に関するIWMとは、自分が他者から、特に愛着対象から受容され、助けてもらえる種類の人物であるかどうか、といった表象モデルである。そして、この二つのモデルは相互に補うように、また相互に強めるように発達するものと考えられており、各個人は、そうしたモデルによって日常的な出来事を知覚し、未来を予測し、自分の計画を作成すると仮定されている(Bowlby, 1973; 久保, 2003)。

ところで、この内的作業モデルは、一度形成されると、その後生涯にわたってその人の人生に影響を及ぼすと考えられているが、本論では、内的作業モデルの変容可能性について検討する。この内的作業モデルの変容可能性については、これまでもいくつかの研究が行われてきている。

ボウルヴィは、IWMについて「IWM形成のもっとも敏感な時期は、生後6ヶ月から5歳前後とし、その後10年間は次第に敏感性を減少させながらも変化するが、その後は一生を通じて比較的变化することなく持続する傾向がある」と述べている(山岸, 1998)。戸田(1991)は、児童期までは愛着に関連した具体的な出来事に応じて変化しながらも発達するが、青年期においては、形式的操作の能力が高まり(メタ認知)、さらに新しい愛着対象の登場により、自分や他者との関係性を客観視することができるようになるために、IWMは大きく変更される可能性がある、と述べている。ここで、IWMの変容において、大きな影響を及ぼすのは、「新しい愛着対象の登場」ということであり、それは家族以外の、その人にとって重要な他者ということになる。

嶋田・田中(2005)は、青年期のIWMの変化を、対人関係との関連から検討し、対人関係、特に重要な他者との出会いによる変化について、8割以上の学生が変化したと答えており、そのほとんどがポジティブな変化であった、と述べている。また、変化をもたらした「重要な他者」としては、友だち・恋人・先生が多かった。IWMの変化と対人関係については、児童期に不安定であったものが、青年期において安定に変化するか、そのまま不安定であるかの2群において差異が見られ、安定に変化した群の方が他者との関係をポジティブに捉え、特に自信や積極性の獲得がIWMの安定に影響を

与えることが示されている。

一方で、IWMの研究においては、どのようにそのIWMを捉えるかが常に課題であり、特に児童期のIWMとなると、実際にどこまで正確に測れるかという方法論的な問題も出てくる。

先述の嶋田・田中（2005）の研究において用いられた尺度は、幼少期は青柳・酒井（1997）による幼少期のattachment尺度を用い、青年期に関しては、詫摩・戸田（1988）のIWM尺度を用いている。これらの尺度は、IWMを安定、不安定の2群あるいは、安定・回避・アンビバレントの3群に分けて分析を行うものである。しかし、これらの尺度による分類の基準は、明確に規定されたものではなく、また安定・回避・アンビバレントの3つの尺度でのバランスをどのように解釈するかで、分類の仕方も異なってくる。

そこで、本研究では、内的作業モデルの測定法として、中尾・加藤（2003）の研究を参考とし、「見捨てられ不安」と「親密性の回避」の2軸による4分類を採用することにする。この尺度は、Bartholomewら（1991）の関係尺度の考えをベースとして作成されたものである。

今回は、児童期から青年期にかけてのIWMの変容に焦点を当てるので、児童期のIWMについても同じように、2軸による尺度の作成を試みる。

これらの尺度を用い、児童期から青年期へのIWMの変容がどのように起こっており、それに重要な他者としての周りの人物（先生や友だち、恋人など）がどのような影響を与えているのか、またその際の重要な他者の特性やイメージを明らかにすることにより、IWM変容との関連性についても検討することを本研究の目的とする。

2. 方 法

1. 調査対象者及び時期

国立大学及び私立大学の学生に対して、調査を実施した。最終的な有効回答は112名であった。分析の対象者は、男性47名、女性63名（性別無記名2名）であり、平均年齢20.5歳であった。

調査は、2007年の10月に、授業後に、協力をお願いし、行った。

2. 調査内容

1) 児童期 IWM 尺度

児童期のIWM尺度については、これまでいろいろな尺度が考えられてきたが、今回は、見捨てられ不安と親密性の回避を2軸とする中尾・加藤（2004）の質問紙を参考とし、ほぼ同じ内容で、質問項目の最初に「私は小さい頃、…」という表現を追加し、小さい頃を振り返ってもらい、回答してもらい、回想法を用いた。小さい頃とは、大学生である調査対象者の振り返りを考え、多くの人が記憶に残っている最も初期のころということで、小学低学年を想定し、[小学校1～3年頃]のあなたにとって、という形で問うことにした。

2) 重要な他者に関する質問

重要な他者（人物）に関する質問項目は、山口・内田（2003）を参考に、以下の3つの領域から構成される質問紙を用いた。

① 重要な他者の存在と属性

重要な他者について、以下のような内容について質問した。

「対人関係の変化」：まず、これまでの対人関係において、小学1～3年の頃と比べて変化があったか、について「変化した」「変化していない」の2択で答えてもらった。

「重要な他者の有無」：重要な他者といえる人物が、親以外で存在したかどうかを、「いる」「いない」の2択で答えてもらった。

「変化との関係」：変化したと答えた人に対し、それは重要な他者との出会いによるものであるか、否かを「はい」「いいえ」の2択で答えてもらい、「いいえ」の場合は、何による影響かを記述してもらった。

「関係」：最も影響を受けた「重要な他者」との関係性については、[先生・友人・恋人・片思いの人・兄弟・先輩・後輩・親戚・芸能人・歴史上の人物]の中から選んでもらった。また、それ以外の場合は、その他として記入してもらった。

「時期」：重要な他者からもっとも影響を受けた時期について[小学校高学年・中学校・高等学校・浪人中・大学]の中から選んでもらった。

「具体的エピソード」：重要な他者になったきっかけやエピソードなどを自由に書いてもらった。

② 重要な他者のイメージ

「重要な他者」のイメージを開くために、山口・内田（2003）の研究を参考に、28項目の特性に関する質問項目を提示し、それぞれが重要な他者のイメージとしてどの程度当てはまるかを、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの、5件法でたずねた。

③ 重要な他者からの影響

重要な他者からどのような影響を受けたのかについて、山口・内田（2003）の研究を参考に、27項目の質問を提示し、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの5件法でたずねた。

3) 青年期 IWM 尺度

青年期の IWM 尺度については、中尾・加藤（2004）により作成された2軸による4分類の愛着スタイル尺度（ECR-GO）を用いた。

3. 分析の手続き

各尺度の基礎統計（天井効果・フロアー効果）を確認し、次に児童期の IWM 尺度と青年期の IWM 尺度について因子分析を行い、尺度の妥当性及び信頼性について確認する。その上で IWM 得点の4分類による児童期から青年期への変化のパターンについて検討し、さらに安定・不安定の2分類による変化の4パターンによって、重要な他者の特性やその影響にどのような違いがあるかを検討する。まず、変化のパターン毎に、重要な他者のクロス表を作成し、変化のパターンと重要な他者の特性やその時期、影響の内容などについて検討する。

最後に、IWM の変化を細かく見るために、IWM 尺度の下位尺度である「見捨てられ不安」「親密性の回避」のそれぞれの得点の児童期から青年期への変化に注目し、その変化の増減によって、重要な他者の特性や影響にどのような違いがあるかについても検討する。

3. 結 果

1. 各尺度の因子分析

1) 児童期の IWM 尺度の因子分析

分析にあたっては、本来の質問紙構成において、2 因子を想定していたので、2 因子解による因子分析を行った。因子の抽出法としては主因子法を用い、その後プロマックス法による回転を行った。なお、因子間の相関は、0.332 であった。

因子分析の結果、負荷量 0.4 以上を基準として検討した結果、いずれの因子においても因子負荷量が 0.4 未満の項目が 8 項目あった。それらの項目を削除して、3 回目の因子分析を行い、最終的な因子の項目を決定した。第 1 因子では、先行研究において見捨てられ不安としてあげられていた項目が多く含まれており、この因子を「見捨てられ不安」(全 20 項目)と命名した。また第 2 因子においても、ほぼ先行研究の親密性の回避と重なる項目が抽出され、これを「親密性の回避」(全 13 項目)と命名した。各因子の信頼性を確認するために、クロンバックの α 係数を求めたところ、第 1 因子 0.902、第 2 因子 0.845 といずれも高い値であった。

2) 重要な他者の特性 (イメージ) の因子分析

重要な他者に関する特性尺度についても、主因子法を用いて因子の抽出を行い、その後バリマックス法による回転を行った。

分析の結果、負荷量 0.4 以上を基準とし、いずれの因子においても因子負荷量が 0.4 未満の項目が 4 項目あったので、この 4 項目を削除して、3 回目の因子分析を行い、最終的な 3 因子解の項目が抽出された (Table 1)。第一因子では、「真正面から受け止めてくれる」「話を聞いてくれる」といった項目の負荷量が高く、さらに「信頼できる」「安心できる」といった項目が含まれており、全体的に他者が自分のことをきちんと受け止めて、理解してくれようとする項目であり、「当てになる存在」(全 13 項目)と命名した。また第 2 因子については、「社交的」「活発な」といった項目の負荷量が高く、「好奇心旺盛」であり「前向きな」他者の存在を感じているようであり、「前向きな存在」(全 6 項目)と命名した。第 3 因子は、「リーダーシップのある」「厳しい」といった項目の負荷量が高く、また「信念を持っている」人であり、「自分の意見をはっきり言う」ことのできる人であり、この因子を「大人の存在」(全 5 項目)と命名した。

なお、それぞれの因子の信頼性について、 α 係数を求めたところ、第 1 因子が 0.939、第 2 因子が 0.834、第 3 因子が 0.771 であり、第 3 因子がやや低めであるが、信頼性の値は十分であると考えられる。

3) 重要な他者からの影響の因子分析

重要な他者からの影響尺度についても、主因子法を用いて因子の抽出を行い、その後バリマックス法による回転を行った。

分析の結果、負荷量 0.4 以上を基準として検討した結果、いずれの因子においても因子負荷量が 0.4 未満の項目が 5 項目あった。また、複数の因子で負荷量 0.4 以上の項目があり、この 6 項目を削除して、3 回目の因子分析を行い、最終的な各因子の項目を決定した (Table 2)。

第 1 因子では、「思っていることをいわなくなった」「無口になった」といった項目の負荷量が高く、さらに「人間不信になった」「人と比べるようになった」といった項目が含まれており、全体的に人に対する信頼が低下し、無口になったり、比較をしたりする内容であり、「人間不信」(全 8 項目)と命名した。また第 2 因子については、「自立しようと思った」「周りに流されず、自分を持つようになった

Table 1 重要な他者のイメージの因子分析結果（バリマックス回転後）

	第1因子	第2因子	第3因子
I 「当てになる存在」 ($\alpha=0.93$)			
28 真正面から受け止めてくれる	0.863	0.033	0.178
25 話を聞いてくれる	0.833	0.175	-0.089
5 信頼できる	0.832	-0.048	0.227
23 自分を認めてくれる	0.807	0.007	0.076
24 励ましてくれる	0.793	0.290	-0.154
26 良い所を見つけてくれる	0.789	0.280	0.061
27 一人前の人間として扱ってくれる	0.771	0.045	0.051
13 安心できる	0.764	0.096	-0.088
4 誠実な	0.728	0.098	0.083
18 自己中心的	-0.668	-0.187	0.012
3 寛大な	0.666	0.168	-0.010
11 正義感の強い	0.440	0.288	0.378
17 冷たい	-0.419	-0.286	0.108
II 「前向きな存在」 ($\alpha=0.83$)			
9 社交的	0.246	0.820	0.136
15 活発な	-0.022	0.773	0.222
16 好奇心旺盛	-0.083	0.674	0.154
10 明るい	0.464	0.661	0.051
8 前向きな	0.368	0.512	0.355
12 面白い	0.366	0.427	-0.133
III 「大人の存在」 ($\alpha=0.77$)			
22 リーダーシップのある	-0.003	0.284	0.774
1 厳しい	-0.132	-0.089	0.673
21 信念を持っている	0.297	0.147	0.605
20 自分の意見をはっきり言う	-0.180	0.131	0.600
7 頼りになる	0.515	0.094	0.542
寄与率	33.15	13.28	10.85
累積寄与率		46.43	57.29

Table 2 重要な他者からの影響の因子分析結果（バリマックス回転後）

	第1因子	第2因子	第3因子
I 人間不信 ($\alpha=0.84$)			
17 思っていることを言わなくなった	0.739	0.068	0.051
4 無口になった	0.720	0.103	0.276
1 自信が持てた	-0.686	0.246	-0.153
23 人間不信になった	0.661	-0.086	0.474
6 人と比べるようになった	0.625	-0.073	0.165
13 飾らず自然体でいられるようになった	-0.616	0.336	-0.067
18 人を信用できるようになった	-0.495	0.319	-0.248
8 自分に厳しくなった	0.459	0.328	-0.395
II 自己受容 ($\alpha=0.79$)			
20 自立しようと思った	-0.068	0.643	-0.026
9 周りに流されず、自分を持つようになった	-0.346	0.637	0.156
3 進路に関する決定をした	-0.066	0.607	-0.062
24 将来について深く考えるようになった	-0.076	0.567	-0.268
11 とにかく行動してみるようになった	-0.369	0.566	0.104
7 視野が広がった	-0.035	0.562	-0.060
25 じっくり考えるようになった	0.130	0.551	-0.074
26 “重要な人”を越えたいと思った	0.225	0.481	0.001
21 人に優しくできるようになった	-0.157	0.400	-0.209
III 情緒不安定 ($\alpha=0.72$)			
12 学校が嫌いになった	0.467	0.100	0.637
19 反抗的になった	0.379	0.002	0.617
15 相手を見下すようになった	0.157	-0.133	0.481
10 短気になった	0.169	0.026	0.417
寄与率	17.77	15.52	9.08
累積寄与率		33.29	42.38

た」といった項目の負荷量が高く、「とにかく行動してみるようになった」「人に優しくできるようになった」といった項目が含まれており、全体的には、自己に対する理解が深まり、さらにその自己を受け入れ、自分や他者に対して、寛容で優しくなったという内容であり、「自己受容」（全9項目）と

命名した。第3因子は、「学校が嫌いになった」「反抗的になった」「相手を見下すようになった」「短気になった」の4項目であり、周りの物や人に対して否定的に見ようになり、情緒的にも反抗的になったり、短気になったりと不安定であり、この因子を「情緒不安定」（全4項目）と命名した。なお、各因子の信頼性について α 係数を求めたところ、それぞれ第1因子が0.842、第2因子が0.791、第3因子が0.721であり、第3因子がやや低めであるが、項目数の少なさもあり、ある程度の信頼性は得ていると理解し、このまま採用した。

2. 児童期と青年期のIWM尺度の関連

児童期のIWM得点と、青年期におけるIWM得点との関係を見るために、それぞれの尺度の相関を求めた（Table 3）。

この結果より、児童期の見捨てられ不安と青年期の見捨てられ不安の間には、 $r=0.45$ という中程度の相関が見られ、児童期の親密性回避と青年期の親密性回避との間にも $r=0.26$ という弱い相関が見られた。児童期の見捨てられ不安と青年期の親密性回避には、 $r=0.11$ 、また児童期の親密性回避と青年期の見捨てられ不安には、 $r=0.06$ とほとんど関連が見られなかった。

一方、青年期における見捨てられ不安と親密性の相関は、 $r=0.12$ と全く見られなかったのに対し、児童期における見捨てられ不安と親密性の回避においては、 $r=0.44$ と中程度の相関が見られた。

Table 3 児童期・青年期におけるIWM尺度の相関と平均

		児童期		青年期		平均	SD
		見捨てられ不安	親密性回避	見捨てられ不安	親密性回避		
児童期	見捨てられ不安	—	.44**	.45**	.11	3.24	0.91
	親密性回避		—	.06	.26**	3.28	0.88
青年期	見捨てられ不安			—	.12	3.41	1.01
	親密性回避				—	3.77	0.93

**; $p < .01$

3. 愛着スタイルの4分類による児童期から青年期への変化の分析

児童期、青年期におけるIWM尺度を使って、見捨てられ不安（高・低）×親密性の回避（高・低）による愛着スタイルの4分類（安定型・拒絶型・とらわれ型・恐れ型）を加藤らの研究に従って行った。

それぞれの高低の組合せ型は以下の通りである。

見捨てられ不安	親密性の回避	
低	低	安定型
低	高	拒絶型
高	低	とらわれ型
高	高	恐れ型

児童期・青年期におけるIWM尺度の各得点の平均値を基に、高群・低群を作り、クロス表を作成した（Table 4）。青年期のIWM尺度が評定不能であった7名を除いた105名を対象とした。

Table 4 児童期 4 分類 と 青年期 4 分類 のクロス表

		青年期				合計
		安定型	拒絶型	とらわれ型	おそれ型	
幼児期	安定型	18	10	3	4	35
	拒絶型	4	7	1	3	15
	とらわれ型	3	1	8	6	18
	恐れ型	5	7	7	18	37
合計		30	25	19	31	105

数値は人数

まず、児童期の分類を見ると、安定型と恐れ型が、30 数名とほぼ同数であった。この結果と青年期の 4 分類をクロスしてみると、まず児童期から青年期にかけて変化がなかったものは、安定型で 18 名、拒絶型で 7 名、とらわれ型で 8 名、おそれ型で 18 名、計 51 名であった。それ以外のもの（54 名）は、何らかの変化があったということである。つまり、ほぼ 5 割の者が、児童期から青年期において、IWM の何らかの変容が生じていると言える。

4. 安定・不安定の変化による他者のイメージ・影響の分析

次に、児童期・青年期の IWM を、大きく安定型と不安定型（拒絶型・とらわれ型・おそれ型）の二つに分けて、その児童期から青年期への変化のパターンを「安定→安定」（18 名）「安定→不安定」（17 名）「不安定→安定」（12 名）「不安定→不安定」（58 名）の 4 パターンに分類した。

この 4 つのパターンを独立変数とし、「重要な他者イメージ」や「他者からの影響」の尺度得点を従属変数とした一要因の分散分析を行った。分散分析の結果、すべての因子で有意な主効果は見られなかった。

5. 変化のパターンと重要な他者との関連について

次にこの 4 パターンによって、重要な他者に関する各質問項目にどのような違いがあるかを検討するためにそれぞれの項目についてのクロス表を作成した。

1) 出会いによる変化の有無

まず 4 パターンに対し、他者との出会いによって、変化が生じたかということであるが、変化していないというものはわずか 8 名であり、そのうち 7 名は、安定から安定へ、不安定から不安定へという形で、得点の上でも IWM の変化が起こっていない。一方、変化したと答えた調査対象者の内、69 名は IWM 尺度得点の変化で見ると、大きな変化はなく、安定、不安定に関しては、変化していない。しかし、これは IWM 尺度得点上では変化していないということであり、調査対象者の意識としては何らかの変化が生じているということであり、今後詳細に検討していく必要がある。

2) 重要な他者の有無

次に、4 パターンにおいて、重要な他者の存在の有無についてみると、全体 105 名中、88 名の者がいると答えており、8 割以上のものが重要な他者との出会いを経験していることがわかる。一方そのような他者の存在しない者 17 名のうち、11 名が「不安定→不安定」の群であり、IWM 得点に変容しうような他者との出会いそのものが、持ちにくかったのではないかと考えられる。

3) 他者との関係性

次に、その重要な他者とは、具体的にどのような関係の人物であるかを見たものが、Table 5 である。全体的には、先生が最も多く、次いで友人、恋人、親友となっている。IWM の変容に影響を与えるのは、主な他者としては学校の先生か、同世代の友人・恋人ということである。ただし、これらの人物との出会いは、「不安定→安定」もあるが、「安定→不安定」に変化している場合もあり、プラス、マイナスの両方の影響を及ぼしうることが示された。

4) 他者による影響の時期

次に、それらの重要な他者からの影響の時期であるが、最も多いのは高等学校であり、次いで中学校、小学高学年となっている（Table 6）。

Table 5 重要な他者との関係

変化パターン \ 関係	先生	友人	親友	恋人	片思いの人	兄弟	先輩	近所の人	合計
幼少期→青年期	安定→安定	6	3	3	1	1	0	0	14
	安定→不安定	4	3	2	2	0	1	0	12
	不安定→安定	3	0	3	2	0	1	0	9
	不安定→不安定	11	10	3	7	0	3	1	39
合計		24	16	11	12	1	6	1	74

数値は人数

Table 6 重要な他者からの影響の時期

変化パターン \ 時期	小高学年	中学校	高等学校	浪人中	大学	合計	
幼少期→青年期	安定→安定	2	3	6	0	3	14
	安定→不安定	1	6	5	1	1	14
	不安定→安定	0	2	3	2	2	9
	不安定→不安定	11	10	18	3	4	46
合計	14	21	32	6	10	83	

数値は人数

6. 「見捨てられ不安」・「親密性の回避」の得点の変化量から見た検討

前節で見たように、IWM のタイプ別の安定、不安定の変化について検討したが、結果的にはその変化への重要な他者の特性や影響については、明確には示されなかった。そこで、次に IWM の変化について、より詳しく検討するために、見捨てられ不安、親密性の回避によるタイプ分けではなく、この尺度得点そのものが、個人の中でどのように変化しているかを見ていくことで、その個人の IWM の変容について検討していくことにする。

まず、「見捨てられ不安」、「親密性の回避」の IWM 得点の変化を見る前に、それぞれの尺度得点の基本統計量を見てみると、児童期は（不安 3.24（0.91）、回避 3.28（0.88））であり、青年期では（不安 3.41（1.01）、回避 3.77（0.93））であり、平均値では、ほぼ同じぐらいである。

そこで、児童期と青年期における見捨てられ不安・親密性の回避それぞれの尺度得点の個人内の変化を見るために、見捨てられ不安変化＝「青年期見捨てられ不安」－「児童期見捨てられ不安」、親密性回避変化＝「青年期親密性の回避」－「児童期親密性の回避」を求めた。そして、この変化量の個人ごとの平均を出して、分析を行った。

この値がマイナスということは、児童期から青年期にかけて見捨てられ不安や親密性の回避が減少したということであり、プラスの場合は、逆に青年期にかけて増加したということである。見捨てられ不安が低く、親密性の回避も低いということは、先述のタイプわけでも示したように、安定型ということになるので、児童期から青年期にかけて、見捨てられ不安や親密性の回避得点が減少したということは、より安定型のほうに近づいているということである。

見捨てられ不安と親密性の回避の変化量の平均値を見ると、ほぼ 0 に近い値であり、その値を基準として、変化量がそれ以下のもの（減少）の群と変化量がそれ以上のもの（増加）とに分類し、不安（減・増）と回避（減・増）の増減から 2 × 2 の 4 群に分けた。

1) 重要な他者のイメージ得点の分散分析

この見捨てられ不安（減・増）×親密性の回避（減・増）の 4 群を用いて、重要な他者のイメージ尺度 3 因子、他者からの影響尺度 3 因子のそれぞれの下位尺度得点について、二要因の分散分析を行った（Table 7）。

Table 7 重要な他者のイメージ・影響の不安（増減）×回避（増減）による分散分析結果

	見捨てられ不安 親密性の回避 N(人)	減		増		F値		交互作用
		減 30	増 16	減 17	増 23	不安	回避	
他者のイメージ								
Ⅱ「前向きな存在」 (SD)		4.20 (0.65)	3.58 (1.02)	3.95 (0.74)	3.87 (0.59)	0.01 n.s.	4.68 *	2.75 n.s.
Ⅲ「大人的存在」 (SD)		3.87 (0.81)	4.13 (0.77)	4.11 (0.58)	3.74 (0.76)	0.20 n.s.	0.20 n.s.	3.55 +
他者の影響								
Ⅰ「人間不信」 (SD)		2.07 (0.51)	2.56 (0.62)	2.55 (0.63)	2.82 (1.04)	5.05 *	5.36 *	0.47 n.s.
Ⅱ「自己受容」 (SD)		3.58 (0.65)	3.56 (0.66)	3.95 (0.54)	3.30 (0.73)	0.16 n.s.	5.31 *	4.52 *

数値は平均値、()内はSD

*: $p < .05$ +: $p < .10$

その結果、他者のイメージである「前向きな存在」得点については、親密性の回避において主効果が見られた ($F=4.68, p<.05$)。つまり、親密性の回避が減少した群においては、重要な他者の特性として「前向きな存在」得点が高くなっている。親密性の回避得点を下げるには、重要な他者として、前向きな姿勢を持った人との出会いによって影響を受けることで変化しうるのであると考えられる。

次に第3因子である「大人的存在」得点についてみると、主効果は見られなかったが、見捨てられ不安と親密性の回避の交互作用において、有意傾向が示された ($F=3.55, p<.10$) (Figure 1)。重要な他者における大人的存在の特性は、見捨てられ不安が減少した群と増加した群では、親密性の回避の増減においては、全く逆の効果となっている。つまり、見捨てられ不安が減少した群においては、親密性の回避が増加した群が「大人的存在」の得点は高くなっているが、見捨てられ不安の増加した群では、親密性の回避が減少した群の方が、「大人的存在」の得点が高くなっている。つまり、重要な他者である人物の持つ「大人的存在」に関しては、見捨てられ不安と親密性の回避に対して、異なった作用を示し、見捨てられ不安を減少させる一方で、親密性の回避を増大させ、また見捨てられ不安を増加させる一方で、親密性の回避を減少させるということも起こりうる。重要な他者の特性の中で、この「大人的存在」というのは、非常に安心感を与え、親しみやすいという一面があると同時に、厳しさや現実的と言うことで、やや不安を与えたり、近づきたいと言うところもあるのではないかと考えられる。

2) 重要な他者からの影響得点の分散分析

次に、重要な他者からの影響尺度の3因子について、まず「人間不信」については、見捨てられ不安、親密性の回避、ともに主効果が見られた (それぞれ $F=5.05, p<.05$, $F=5.36, p<.05$)。人間不信は、見捨てられ不安の増加群、親密性の回避の増加群とともに高く、これら2つが高まっていると言うことは、結果的に人間不信になっているということである。これらより、IWMが不安定な方向に、つまり見捨てられ不安や親密性の回避が高くなるような変容においては、重要な他者からの影響として、「人間不信」ということが関係しているということが示唆される。

次に他者からの影響の「自己受容」についてであるが、まず親密性の回避において主効果が見られ ($F=5.31, p<.05$)、さらに交互作用も見られた ($F=4.52, p<.05$) (Figure 2)。つまり、親密性の回避の増減において、減少している群の方が自己受容の得点が高くなっている。他者との出会いによって自己受容が高まるような影響を受けることで、親密性の回避が減っていくものと考えられる。

また、見捨てられ不安と親密性の回避において、見捨てられ不安が減少した群では、親密性の回避の増減に関わりなく、自己受容の得点は同じぐらいであったが、不安が増加した群においては、親密性の回避が増加した群では自己受容得点は低くなっているが、親密性の回避が減少した群では、自己

受容は高くなっている。つまり、見捨てられ不安自体は増加し、高まっても他者との親密性の回避が減少し、他者と親密な関係になることで自己受容は高くなるのではと考えられる。最後に、他者からの影響において、「情緒不安定」得点について検討したが、主効果、交互作用ともに有意ではなかった。

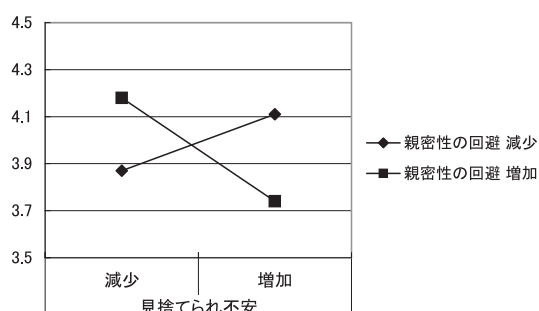


Figure 1 「大人の存在」得点の交互作用

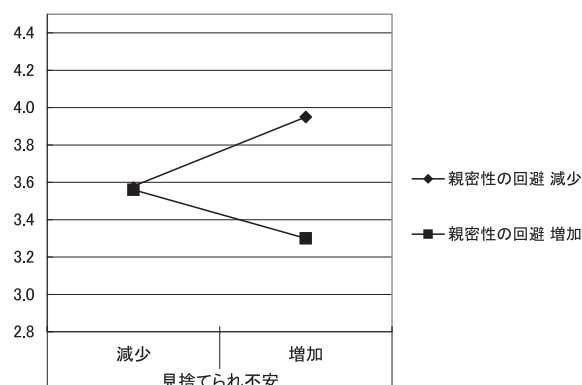


Figure 2 「自己受容」得点の交互作用

4. 考 察

1. 各尺度の因子分析結果と尺度間相関について

まず児童期における IWM 尺度の因子分析結果については、青年期と同じく 2 因子解が妥当であり、負荷量の低い項目がいくつか削除されたが、青年期とほぼ同じような因子構造が見られた。

次に、重要な他者のイメージであるが、「当てになる存在」「前向きな存在」「大人の存在」の 3 因子が抽出されたが、いずれも自分にとって理想やモデルとなるような人物のイメージであり、そこから様々な影響を受けていると考えられる。ただ、影響の尺度においては、「人間不信」「自己受容」「情緒不安定」と、ポジティブな影響とネガティブな影響の両方が抽出された。つまり、重要な他者からの影響は、必ずしもポジティブなものだけではなく、ネガティブなものも含まれていると考えられる。

児童期と青年期の尺度間の相関については、見捨てられ不安は中等度の、また親密性の回避では、弱い相関がみられている。これは、児童期と青年期においてほぼ同じような内容を聞いており、ある程度の相関が示されたということは、ボウルヴィが指摘するように、児童期までに形成された IWM は、ある程度の一貫性をもって、個人の対人関係のパターンとして説明できると考えられる。ただし、親密性の回避に関しては、やや相関としては低く、児童期から青年期にかけて一貫したものではなく、変容する可能性が示唆された。

一方、青年期における見捨てられ不安と親密性の相関は、0.12 と非常に弱かったのに対し、児童期における見捨てられ不安と親密性の回避においては、0.44 と中程度の相関が見られる。本来、この二つの因子は独立の要因であり、相関は低いと考えられるが、児童期においてはかなり高い相関が示されている。これは、大学生に対し、児童期を振り返り、回想的にその時代を想起して答えてもらったので、必ずしも「見捨てられ不安」と「親密性の回避」が明確に区別されたものと認知されず、かなり重なったものとしてイメージされた可能性がある。その結果、この 2 因子の相関がやや高くなったのではと考えられる。

2. 愛着スタイルの4分類による変化について

Table5 で示されたように、愛着スタイルの4分類による児童期から青年期への変化においては、およそ半数の者が変化し、残りの半数は変化していない。これをどのように解釈するかは難しいが、少なくともボウルヴィが指摘したように幼少期に形成された愛着スタイルはかなり安定したものと考えられるが、一方で少しずつ変容していく可能性が示唆されたと考えられる。中でも、割合として多かった安定型と恐れ型では、かなり対極にあるパターン、つまり見捨てられ不安、親密性回避が共に低い低・低群から高・高群への間においても変容が見られる。このようなタイプについては、今後どのような体験や人とのかかわりにより影響を受けたのかを、詳細に検討していく必要がある。

3. 安定・不安定による変化のパターンについて

安定・不安定の2分類による変化のパターンによる重要な他者のイメージ・影響の得点について、分散分析を行ったが、いずれも有意な結果は示されなかった。

この結果について、IWM 得点の変化に関して、重要な他者のイメージやその影響は、それほど関連はないともいえるが、ただこの4群においては、その人数のバランスにやや偏りがあり、また安定から不安定に変化したと言っても、数値的には平均値に近いところでのわずかの差である場合も考えられる。

次に、変化パターンによる重要な他者の存在等についてみると、まず他者による変化や他者の存在が変化のパターンに関わらず認められる。つまり、青年期の意識としては、何人かの重要な他者に出会い、何らかの変化をして来ているという認識であると考えられる。しかし、それは愛着スタイルという視点でみると、必ずしも変化しているとは言えない部分もあり、どのような意識で変化し、他者の影響を受けたと理解しているかは、詳細に検討していく必要がある。

また、重要な他者としては、先生と友人・親友がほとんどを占めていた。つまり、IWM の変容においては、学校の先生や友人からの影響が大きいと考えられる。影響を受けた時期も小学・中学・高校とそれぞれにおいてみられるが、特に IWM の不安的な人にとっては、小学校の時期の影響も大きいようで、そこには先生によるサポートの影響があるのではと考えられる。

大学というのは少ないが、今回の調査対象者が大学2回生（平均年齢 20.5 歳）ぐらいであるので、大学における変化というのはまだ実感としては持ちにくいのではと考えられる。ただ、ボウルヴィの考えでは、5 歳ぐらいまでに IWM は形成され、それから約 10 年ぐらいは緩やかに変化するということであるが、今回の調査対象者の結果を見ると、中学生から高校生にかけて、意識のうえでは何らかの変化を感じていることがうかがえる。これは実際の IWM の変容とどのようにつながるものであるかは今後検討する必要があると思われる。

4. IWM 得点の変化量と重要な他者との関連

見捨てられ不安、親密性の回避の増減に関して、重要な他者の特性との関連を見ると、前向きな存在としての他者が、親密性の回避得点を低下させることに関連していることが示されている。つまり、他者と親密になり、関係を持つには、かなりの不安や恐怖を感じるが、相手が前向きな人であると、おそらくその影響を受けて、自らも前向きになり、他者と関わろうとする意識が芽生えるのではと考えられる。

また、「大人の存在」としての他者の特性は、見捨てられ不安と親密性の回避においては、異なる関連が示されている。これは非常に重要な視点であり、大人の存在との出会いは、見捨てられ不安が減少した群では、親密性の回避は増加している。青年期において、見捨てられ不安が減少するこ

とは、相手への信頼や安心感が増加するが、それは必ずしも親密性の深まりとは関係していないということである。つまり、この青年期においては、不安が低下し、安心感が増えると、他者と親密になるというよりも、一人でいる能力が高まるのではと考えられる。同じように、大人の存在に出会って、見捨てられ不安が高まると、一時的に親密性が高まり、誰かと親密な関係を持つことで、不安に耐えていけるようになるのではと考えられる。このように、青年期においては、大人の存在という社会の現実と出会うことで、多くの刺激を受けるが、その揺れを不安と親密性でうまくバランスを取りながら、乗り越えていくと考えられる。そして、その後に成人としての見捨てられ不安の低い中で、他者と親密な関係を形成できる段階に達するのではと考えられる。

次に、重要な他者からの影響については、人間不信という体験により、見捨てられ不安、親密性の回避ともに高まるということは考えられる。人間不信、つまり他者との関係において裏切られたり、傷ついたりするようなネガティブな体験をすることは、IWMを不安定な方向に変容させる可能性が示唆される。また、「自己受容」についても、親密性の回避を低下させる体験であり、特に親密性の回避が減少した群において、この自己受容の影響が大きい。つまりこれは、重要な他者との出会いによって、自己受容が高まるような影響を受けることが、親密性を深めることにつながり、他者により自然に、深く関わられるようになると考えられる。しかもそこには、見捨てられ不安が多少高くなっても、親密性の深まりにより、自己受容も高くなることが示唆されている。

5. まとめと今後の課題

以上のことから、本研究の結論として、以下のようにまとめられる。

1. IWMの変容を検討するにあたり、まずその尺度としての妥当性・信頼性について検討し、児童期においても青年期と同じように「見捨てられ不安」と「親密性の回避」の2つの因子が抽出された。
2. 重要な他者の特性として「当てになる存在」「前向きな存在」「大人の存在」の3つの因子が、またその人物からの影響として「人間不信」「自己受容」「情緒的不安定」の3因子が、それぞれ抽出された。
3. 児童期から青年期におけるIWM得点の変化は、約5割の調査対象者においてみられ、IWMそのものが、児童期以降の様々な人との出会いを通じ、変容しうるものであることが示唆された。
4. IWMの変容に関する重要な他者として、学校の先生や親友、恋人などが考えられる。また、その影響を受けた時期としては、高校を中心に、中学や大学時代においても見られた。
5. 見捨てられ不安、親密性の回避の各得点の変化の増減から、重要な他者の特性について検討した。その結果、前向きな存在の他者との出会いによって、親密性の回避が低下することが示された。また、大人の存在としての重要な他者は、見捨てられ不安と親密性の回避にとって、逆の効果を示す場合があることが示唆された。人間不信という体験は、見捨てられ不安や親密性の回避を増加させ、社会適応上の問題につながる可能性が考えられる。さらに、重要な他者との自己受容という体験は、親密性の回避を低下させ、他者との関係を築き、深めていくには重要な要因であると考えられる。

以上が、本研究で示された結論であるが、今後の課題として、まずデータの数がそれほど多くなく、さらにデータ数を増やして細かな分析を行う必要があること、また、今回は相関や分散分析による関

連性に関する研究であったので、今後はその因果関係を含めた分析を進めていく必要があると考えている。

謝辞：本調査を実施するにあたり、ご協力いただいた古家美穂さん、小山三奈子さん、大田千登世さんに、記して感謝の意を表します。なお、本研究は科学研究費補助金（課題番号：17530506）の助成を受けて実施された。

引用文献

- 青柳 肇・酒井 厚（1997）.「アダルト・アタッチメントと回想による幼少期のアタッチメントとの関係」. 早稲田大学人間科学研究, 10（1）, 7-16
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M.（1991）. Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and social Psychology*, 61, 226-244.
- Bowlby, J.（1969）. *Attachment and Loss: Vol.1.Attachment*. New York: Basic
- Bowlby, J.（1973）. *Attachment and Loss: Vol.2.Separation*. New York: Basic
- Bowlby, J.（1980）. *Attachment and Loss: Vol.3.Loss,Sadness and Depression*. New York: Basic
- 原田正文（2004）.「変わる親子，変わる子育てー「大阪レポート」から23年後の子育て実態調査よりー」. 臨床心理学, 23, 586 - 590.
- 数井みゆき・遠藤利彦（2007）.「アタッチメントと臨床領域」. ミネルヴァ書房
- 久保 恵（2003）. 情緒的対人情報処理と内的ワーキングモデル. 風間書房
- 中尾達馬・加藤和生（2004）. “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討. 九州大学心理学研究科, 5, 19-27.
- 嶋田美由紀・田中雄三（2005）. 青年期の対人関係が内的作業モデルの変化におよぼす影響, 鳴門生徒指導研究, 15, 16-29
- 詫摩武俊・戸田弘二（1988）. 愛着理論から見た青年の対人関係:成人版愛着スタイル尺度作成の試み. 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.
- 戸田弘二（1991）. Internal Working Models 研究の展望. 北海道大学教育学部紀要, 55, 133-143.
- 内田利広・河合三奈子・大田千登世・大東映美（2003）. 日本における内的作業モデルに関する研究の現状と今後の展望. 京都教育大学紀要第, 117, 99-11.
- 山岸明子（1998）. 看護短大3年時と卒後2年目の内的作業モデル. 順天堂医療技術短期大学紀要, 9, 45-54.
- 山口美穂・内田利広（2003）. 内的作業モデルの変化とその要因についての研究ー「重要な他者」と「自己関係」との関連からー. 第20回日本家族心理学会発表抄録集. 73.